

昭和五二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079
振替 東京0158431 労金 東京労金本店 No.329915

購読料 月額300円 6カ月前納制

〈も く じ〉

労働運動における二つの潮流	2
自信をもって七八春闘をたたかおう	5
―七七春闘の教訓を七八春闘へ―	
冷酷な強盗とお人好しの貧乏人	8
科学を空想にひきもどす	
田英男氏の「新しい」社会主義	10
■誌上学習会 マルクス・レーニン主義とは何か④■	
マルクス主義はたたかいかいの中で発展	12
―レーニンと修正主義批判 中―	
精神面で「国民」統合をめざす	
―社説にみる独占資本の意図―	17

旬刊 社会通信

NO.11

一九七八年二月二日

一九七八年二月二日発行

(毎月一日・二日・二日三回発行)

労働運動における二つの潮流

一

わが国の労働運動（資本主義国ではどこでもそうなのだが）には、大きく二つの潮流がある。これらの潮流の傾向とその本質はどこで区別されるのだろうか。政策の現実的、客観的意義によってである。政策が大衆を代表するものなのか、つまり労働者大衆の資本主義からの解放に役だつものなのか、それとも少数者の利益を、少数の資本家階級（全国民のわずか〇・六%にもみたくない）との和解を代表するものなのかである。前者が、総評がこれまで歩んできた、そしてこれからも歩みつづけるであろう階級的労働運動の道であり、後者が、生産性向上、つまり資本主義の合理化に両手をあげて賛成する同盟の「民主的」労働運動の道である。

エンゲルスは一八八九年一月七日、ゾルゲにあてた手紙のなかで、当時のイギリス労働運動の現情を次のように書いていた。「ここ（イギリス）でいちばんいやでたまらないのは、労働者たちの血肉に深くしみこんでいるブルジョア的な（お上品ぶり）である。：私がいちばんりっぱだと思っているトム・マンでさえ、市長閣下と昼食をともにすること、喜んで話すしまつなのだ。これとフランス人とをくらべてみると、革命というものがどれほど役に立つかが、とにかく分かる」と。〇〇年ちかくも前の叙述である。ところが、私たちの身の回りでこれに類似したことが、どれほど頻繁に見られることだろうか。

エンゲルスの偉大さは、今日の客観的条件によって与えられる、労働運動の戦術の要を明らかにしていることだ。つまり、改良主義者と「下層の大衆」≡ほんとうの多数者を区別し、「ブルジョアのお上品さ」に感染していない、労働者大衆に呼びかけていることである。ここにマルクス主義の核心がある。

二

一月一八日から三日間、同盟は第一四回大会を開いたが、その運動方針から簡単にその傾向をさぐってみよう。

運動方針は四つの部分からなる。だが「第一部、当面の運動の基調と目標」に、その本質が語りつくされている。主要部分をかかげておけば――

一、安定経済成長の追求 ①調整期にある日本経済 ②安定成長の追求 ③自主的活動の強化

二、連合時代の展望と政治活動 ①新しい政治の流れ ②連合時代の到来 ③連合時代への対応と課題

三、労働戦線統一への今日的意義 ①流動化と各種の統一論 ②労働戦線統一への今日的意義と同盟の方針

四、参加経済体制の推進と産業民主主義の確立（以下略）

ここには、社会を変革しようとの「意志」も「情熱」も「カケラすら見られない。資本家階級へのへつらい、ペてん、流行の人氣ある（そのじつ中味はカラッポの）スローガンを使う手品、そのうえに労働者にあらゆる改良、あらゆる福祉を与えようという、見さかえなくばらまかれる約束、等々だけである。

同盟の「紳士」諸君は、大声で「安定成長、安定成長」と呼んでいる。その道筋を明確にしなければならぬともいう。にもかかわらず、運動方針に書き連ねられた文々は、空疎なる空文句ばかりである。

「われわれは、産業政策の一層の充実をはかり、その政策目標と体系・政策手段ならびにそれを実現していく道すじを一段と明確にし、実践しなければならないが、今日もっとも重要なことは、これまでの無秩序な生産にたいして秩序を与え、更に経済を安定的に成長させるための基本的メカニズムを確立することである。われわれは、これを福祉型経済の定着、混合経済体制（計画的市場経済）の確立と参加体制の推進に求めている」（同盟運動方針、二頁）。

「無秩序な生産」に「秩序を与え」、「国民の生活、福祉の安定的向上を保障」する道が、「福祉型経済の定着、混合経済体制（計画的市場経済）の確立と参加体制の推進」だとおっしゃる。つまり、資本主義のワク内で「無秩序な生活」に「秩序」を与えることができるかとされるわけだ。空想的社会主義の現代版である。しかも、この「社会主義」は手あかに汚れている。同盟の幹部諸氏が公然とあるいはこっそりと寸借し、「おれたちの青写真」としている西ドイツでは、公式統計ですら一〇〇万もの失業者がいるのだ。これが「福祉型経済」、「混合経済体制」、あるいは「参加体制」の実態である。

彼らの主張の本質は、「政策」が具体化されればされるほど明らかとなる。「連合時代」という言葉が、くさったバナナをたたき売るかのように大安売りされていることも、その一つの例証であるにすぎない。

「これまで、自・社両党の不毛の対立に終始し、ともすれば形骸化していた議会制民主主義が新しい息吹をはじめたものといえる。まさに政治の流れは変わり、新しい時代が開けつつあるといわなければならない」（同、二頁）。

「それだけに自民党は、今後、必死となって選挙戦に臨むであろうが、われわれの努力によっては今後の国政レベル選挙を通じて、自民党が衆・参両院あるいはそのいずれかにおいて過半数の議席を失う時期がそう遠くないであろう。これを起点としてわが国の政治は、これまでと異なった政権構成——新しい政府の在り方をめぐって幾つかの政党による多様な連合もしくは協力関係が考えられる——に変化する時代、すなわち「連合時代」をむかえることが予測される」（同、三頁）。

つまり、「政権がすぐ手の届くところまでやってきた」、「それに備えなければ」というのである。どのように備えるのか。「多様な連合」、もしくは「協力関係」という。この「多様な連合」、「協力関係」がなにを意味するかは、自民党との「多様な連合」、「協力関係」に他ならないことを、過日公明党が示してくれたところでもある。

三

しかし、さすがの彼らといえども「連合時代」とやらが、安定した時代とは考えていな

い。彼らも「不安定」な時代といっている。そこで問題は、「秩序を与え」るためにだれとたたかい、労働者の「いのちと権利」を本当に守れる社会とするかということになる。同盟運動方針にはこうある。

「安定した連合時代の創造も、建設的なる革新政権の樹立も、その根本は民主社会主義勢力が資本主義の改革をおそれる保守、マルクス・レーニン主義にたつ革命両勢力を凌駕して安定勢力を形成しうるか否かにかかっている」(同、三頁)。

「資本主義の改革をおそれる保守(田英夫の言葉ではウルトラ保守ということであった・筆者)、マルクス・レーニン主義にたつ革命勢力を凌駕することだといっている。くわしくは『社会通信』(第四号)『反独占・社会主義への道か、反社会主義・保守連合への道か』を参照していただくことにして、この考え方は、田英夫ら三人組の考え方とまったく一致していることだけを指摘しておこう。

こうして、同盟の「紳士」諸君は、階級的労働運動の路線にはげしい敵意をたぎらせる。それは、同盟の運動方針が総評労働運動に無茶苦茶な干渉をおこなっていることに、なりよりも明瞭に語られている。

「総評は、発足以来『社会主義協会』とは深いかわりをもち、その指導者の多くは協会に所属し、あるいはその思想的・理論的影響をうけてきた。総評の労働組合論、方針は協会理論そのものであり、また常に、社会党にたいしてその階級政党化を要求してきたのであった。今日の社会党・総評ブロックの形成も協会の、従って、その思想を媒体として培われてきたものである。／われわれは、総評発足以来、一貫して総評の誤れる指導方針を批判し、これを克服しようとしてきたが、この闘いは、実は協会派思想との対決であった。また、六五年以降の労働戦線の流動化も協会派理論に基礎をおく方針にたいする反省と批判を出発点としたものであった。／社会党における構造改革論の提起もこれと軌を同じくするものであるが、この論争が総評に飛び火し構造改革をめぐる内部に対立を惹起し、主流派の間に亀裂を生じることになったことは、われわれの記憶に新しいところである。総評が党の分裂を避けるという立場から、協会の理論集団化を要求したのも、それが総評にハネ返ることを恐れたからである。だが、総評が社会党員協議会によって運営されているだけに、今後の社会党内の改革論争の成り行きによっては総評の組織的危機につながる可能性を内包している。このようにみれば、政治の新しい動向は、労働戦線の流動化を、層激しいものとするであろう。われわれは、労働戦線を再編し、ゆるぎない新しい統一体を創造することに勇気をもって挑戦しなければならぬ。それはまた、建設的革新政治勢力の再編成を促進することにもなる」(同、三～四頁)。

四

今、私は同盟の運動方針からその特徴をかんとんに紹介した。しかし、今日自覚した労働者の進む道はいたずらに「幹部」を批判したり、仲間を批判することではない。もっと下の方へ、もっと深く、ほんとうの大衆のところへ行くこと、そして組織づくりに全力をつくすこと、これである。ここに改良主義との全闘争の全意義があり、この闘争の内容がある。大衆闘争路線を徹底的におしすすめること、ここに七八春闘のポイントがある。こうした力が反独占統一戦線の中核として成長するからである。しかも仲間からの報告は、力強い一歩をふみだしていることを示している。

(加藤俊一)

自信をもって七八春闘をたたかおう

——七七春闘の教訓を七八春闘へ——

レーニンのは、論文『マルクス主義と改良主義』で、階級的労働運動について次のように言っています。「労働運動が自立的で興行が深く、その目標が広大であればあるほど、それが改良主義の狭さから解放されていればいるほど、それだけですます労働者は個々の改善を強個なものにして、それらを利用するのに成功するのである」と。このレーニンの指摘が、具体的にどうあらわれているか。国鉄のなかまの報告から紹介しよう。

この国鉄の仲間のように、職場でのあるいは地域での報告を届けてくださいることを願ってやまない。
(編集部)

七七春闘で得た大きな教訓

私たちは昨年一年間、七七春闘と参院選闘争を精一杯たたかってきました。私たちはこうしたたたかきを通して、階級闘争全体の流れを科学的にとらえることができるし、その流れを強め、たくましく、大きくしている意義をしっかりとらえなければならぬと考えられています。資本主義の「危機」の深まりにふさわしく、ともすれば一方では「空文句」がはびこり、他方ではとても「厳しく」身動きならないような情勢に見え、私たち自身がっかりした方向を堅持していかないと、振り回されてしまうからです。

私たちがこれからたたかう七八春闘もそうですが、七七春闘は三年つづきの「不況」という客観条件のもとでたたかわれました。二年連続低賃金で押え込んだ独占資本は支配体制維持のため総力を上げ、たち向かってきました。二百カイリ問題などを通しての反社会主義キャンペーン、不況「赤字」宣伝、企業防衛のための労資正常化攻撃であり、日経連のいわゆる四〇〇万人首切り合理化でした。階級対立の激化は「不況」のなかで、もっとも露骨な「事態」としてさらけ出されました。私たちは、なによりも労働者階級の「窮乏化」を問題にして七七春闘をはじめとする諸闘争をたたかってきました。

以下、この「窮乏化」を自分の生活と労働実態を通し、具体的事実からたたかってきたその教訓点を明らかにしたいと思います。

労働条件と賃金のたたかきを結合

S 駅では一九七六年一月末から年配者を中心に、胃腸病による長期病欠者が続出ししました。さらに転勤者や鉄労の組合専従もあり、要員が足りなくなりました。その結果、勤務変更や三徹の続出と勤務がきつくなり、また誰かがカゼなどで休もうものなら、代替の人がいなくて仕事ができない状態でした。こうした厳しい勤務のなかで心身ともに疲れ傷害事故が多発したのです。

仲間は自分の実態について話し始めました。討論者のなかに「現在の運動にあって未来

を代表する「人がいたことはいうまでもありません。「休みの日でも胃が痛くてトマリに起きる三時頃に目がさめる」、「胃が悪いのだが、子供や妻のことを考えると医者にもかかれぬ」、「胃が悪く病院に通って三年目になる。医者からは『不規則な勤務だから』と言われる」などの討論で、「仕事で身体がボロボロにされている」と我慢を重ねてきた年配者の人も真剣に考えるようになり、当局に怒りをぶっつけました。

賃金要求の討論はこのような状況のなかでおこなわれました。組合本部アンケートの最高額が八万円であることに不満をもちながらも、家庭にもち帰るなど真剣に取り組みました。仲間は、労働大学の『経済学入門』を学習しながら、自分の生活の「コマ」を見直し、妻と相談し要求額を作っていました。一番困ったのは文化的生活費でした。思いつくままにカメラとか本、旅行、コンサートなどを書いていきました。すると妻は「これがないと生きていく意味がないネ、食うだけでやっとの生活では何のために生きていく」と訴えてきたのです。

結果的に三五万五、〇〇〇円になりました。額は多いがけっして非常識であるとは思いませんでした。むしろ、自分の生活がいかにみじめで非人間的であるかを、実態を見るなかで改めてしみじみと感じたのです。このような生活に追いつめていく独占資本にたいし、激しい怒りがわいてきたのです。職場の仲間からは「三五万五、〇〇〇円は高すぎる、取れっこない」など批判的な意見が多かったです。討論のなかで「当り前の要求」と変わると、確信をもち、粘り強く話していったのです。こうして、仲間との討論は「取れる取れないで要求するのではなく、人間らしく生きる賃金要求を出すべきだ」と変わってきたのです。

国労の賃金要求が三万二、〇〇〇円に決まったときは、ガッカリするとかたたかう気がなくなるといってはいけなく、むしろ三万二、〇〇〇円はビター一文削ることができないと言いつけるようになりました。たたかう根拠をもったからです。

このような討論が進むなかで、二月二三、二五日に胃腸病で入院していた四七歳と五一歳の二人の鉄労組合員が相次いでなくなりました。職場では「Aさんが危篤だ」、「B型の人は輸血を」、「Cさんが昨夜なくなつた」というのがあいさつになり、職場は暗黒になりました。「こんな職場で働いていられるか」、「みんな転職希望を出すべや」の声もだされました。二人は資本主義的合理化によって殺されたのです。一週間の点呼後の抗議や団交で、当局の責任を追及しました。「身体をボロボロにし、二人を殺しておきながら我慢と言おうのか。賃金が安いうえに労働強化では身体がもたない」と、賃金要求の討論と結合した抗議でした。これら要員闘争、春闘を通じ自分の置かれている立場、つまり、資本によって搾取されていること、階級対立の存在を生活のなかで自覚することができました。

たたかいはさらに奥行が深くなりました。「人間らしい生活とは何か」の討論は、「俺たちは人間らしい労働条件を要求する権利がある」との拡がりになり、職場を点検し、環境改善の要求として発展したのです。そうした自覚は(1)学習意欲の向上、(2)労働者同士の連帯意識の高揚となってあらわれしました。間合時間での学習会、I 駅・M 駅との交流、さらに全通との交流等々がそれです。こうして、一時間ストを精一杯たたかひぬくことができたのです。こうして私たちは職場のたたかいこそが、あらゆるたたかいの土台であると

の確信をもつことができませんでした。階級意識なくして労働運動は本当のひろがりをもつことができないことも合わせて学びとりました。

妥結後、その低さに不満をもちながらも「昨年から一つ一つの問題をみんなて話し合ってたたかわなければならぬと思った」、「毎日、毎日のたたかいがミニ春闘だ」、「仲間間の成長や団結が強くなり、これほど充実した春闘はなかった」と、全員が自信をもつことができたからです。学習意欲も高まり、青年部では一人平均三冊、学働大学の本を買って学習会を始めています。こうしたたたかいは同時に、政治意識をも促し、参院選闘争も分会としてかつてないたたかいとなり、組織拡大も進んでいったのです。

学習こそがたたかいのエネルギー

このたたかいのなかで私たちは多くのことを学びました。また、今後の運動に参考になることがあると思います。要約すれば次のように言えると思います。

第一は、生活と労働実態のなかにたたかう条件があるということです。

「合理化」に次ぐ「合理化」攻撃による欠員の増大、過密ダイヤによる長時間労働が強いられ、あらゆる職場に労働災害、職業病、運転事故や傷害事故が多発しています。資本主義の矛盾が深まれば深まるほど、資本の「ゼイ肉おとし」||「合理化」はますます進みます。また、インフレのなかで賃上げをおさえられた私たちの生活は確実に悪化しています。

他方、私たちの運動はこうした不況下のもとでむずかしくもなっています。しかし、七七春闘のなかで、このむずかしさを乗り越えて大衆的に正面から敵の攻撃に抵抗する仲間がふえています。そのことが一番はっさりあらわれているのが賃金闘争の改善、強化でした。I 駅やA地区の仲間などは生活と労働実態の討論から、たんに活動家だけでなく働く仲間の大部分が「人間らしい生活を」とたたかいに立ち上がっています。

ここを一番大事にするのが運動ではないでしょうか。自からの生活から作った要求を大事にしなくては、運動は力強くなりません。「合理化」にしても同じです。職場でどうたたかう態勢をつくり、仲間と本質を討論し学習し意志の統一をはかることが大事です。

そのためには、自分自身に怒りがなければなりませんし、仲間とのあいだに信頼関係が生まれていなければなりません。資本主義の盲目的な力にたいして無力なように見える労働者の生活を具体的な事実とおして、「それは搾取の結果だ」と、解きほぐす能力が私たち一人一人が要求されているということです。学習は、賃金闘争も労働条件の改善のためのたたかいかも、あるいは「合理化」と賃金闘争を一体のものとしてたたかう自覚を植えてくれたように思います。

私たちのたたかいがなぜこのように発展できたのかを、今振り返ってみるとき、昭和四八年以降つづけられてきた学習会にゆきあたります。赤字宣伝攻撃のなかで「赤字でもわれわれの生活が先だ」と言い切ることでできたのは、「働くこそが社会の主人公だ」ということを学んだからです。

七七春闘で大きく芽ばえたたかいの芽をさらに大きく発展させるために、いっそう努力し、全国の仲間とともに七八春闘の経験を交流し、たたかいに生かしてゆきたいと考えています。

(宮城・S)

冷酷な強盗とお人好しの貧乏人

一

七八春闘をまえに『賃金問題研究委員会報告』（日経連）と『七八国民春闘白書』が公表されている。後者についての検討は本通信に連載（第八号、第九号）されたので、私は前者の構えを検討し、「白書」の構えと比較してみたい。

『報告』で独占資本はその階級的立場をつつみかくさずつき出している。『報告』が宣伝し扇動しようとしているただ一つのは「生産性基準原理」と称される思想、つまり「企業防衛なくして従業員の生活防衛はできない」という思想である。そして自らの危機をのりきるために不況下でこの思想を徹底的に確立しようとうまずたゆまずうたえている。たとえば次のように――。

「各企業の労使は近視眼的ではなく、長期見通しに立って、わが国独得の労使関係を十分に生かしつつ、困難を乗り切っていくかねばならない。そのためには日経連が年来唱えてきた生産性基準原理を現下の経済情勢に応じてそれぞれの職場に生かすべく、労使は自主的に賃金交渉の妥結に向かって協力すべきことを再説して結語とする」（三三頁）。

二

また『報告』は資本主義とは何か、「不況克服＝安定経済成長」とは何かを実によくこころえている。つまり自分の生きる道は生産過程における相対的、絶対的剰余価値の生産しかないことを本能的に自覚している。だから「不況克服」にあれこれ空想的なことをいわず、『資本論』にかかれてあるとおりのことを冷酷に実行しようとしている。

『報告』は、まず第一に賃金の切り下げを強調している。「失業者数は二百万人を超えている状態」では「労働力の過剰が賃金を押し上げる要素となることは当分考えられない」。つまり過剰資本によって充用しえぬ相対的過剰人口の存在をテコとして賃上げをおさえる。さらに「企業のコスト増を無視して消費者生活のみを従来どおりの状態に維持」することは不可と、実質生活の維持すら否定している。また、中高年層対策として「年功序列賃金体系と退職金の累増制」の再検討を労働組合につきつけている。これによって何百万という高齢者が賃下げ、首切りの対象となる。第二に「過剰設備の整理」とそれにもなう「過剰雇用の転換」をあげている。つまり一定の利潤を回復するまで過剰資本を破壊しつくす。そこで働いていた労働者がどうなるかと資本の関与するところではない。だから『報告』では「構造的不況業種」に働く四〇〇万人は石炭合理化のときより「格段の困難が伴

う」が「転換」(つまり首切り)しなければならぬといっている。

第三に労働時間の延長である。報告は「時短は必ずしも雇用拡大にはつながらぬ」と残業の強制を宣言している。第四に直接報告ではふれられていないが機械合理化、生産性向上である。これは必然的に労働強化を伴うが、同時に本工を大量に追放する条件をひるげかわってパート・臨時工を劣悪な労働条件のもとで働かせる体制をつくりあげている。

ところで『報告』は「国債の増発——民需の振興は当面の応急対策としては緊要としても、いつまでも続けることはできない」、輸出貿易の必要なことはいうまでもないが輸出主導型成長には限界がある」とのべている。つまり、輸出やインフレ政策によるもうけはさて問題ではなく、生産過程での搾取強化こそが肝要なのだ、体制的合理化こそが本格化されねばならないのだ、といっている。

こうして――

「経済の発展には企業経営を安定させ、その体質を強化することが必須条件である。今日の五、六%の低成長時代において、不振に陥った企業がはなはだしい不況感から脱出するための要件は、第一に過剰設備の整理であり、第二に自己資本比率を高めて金融費用の節減に努めることであり、第三に過剰雇用を転換することによって減量し、低成長時代にふさわしい人員構成にすることであろう……さらにこうした中でコストと価格の調整、賃金と生産性との間にバランスをとることが要請されるのである。(九頁、一頁)」。賃金と生産性の問題については、労使の協力が絶対に必要なのである。(九頁、一頁)」。とのべられているのである。

三

この独占資本の法則にそった教科書どおりの構えにたいし、「春闘白書」はどうだろうか。教科書どおり体制的合理化にたいし労働者が統一して闘う客観的条件が急速に深まっているという自信に裏うちされているだろうか。

敵が「要するに利潤だ」と明言しているとき「要するに労働者の生活だ、合理化反対、大幅賃上げだ」となぜいってのけないのだろうか。われわれは「不況を克服し日本経済を安定させる」ために春闘をたたかうのだろうか？ 労働者がすこしでも人間らしく生きるためたまたかうのではないだろうか？ 景気が回復しても労働者の状態は改善されないという事実、労働者が頼れるのは唯一自分自身の力だという事実をなぜもっと確信をもってあきらかにしないのだろうか。独占資本にたいし、あまりにお人好しではないだろうか？

科学を空想にひきもどす

田英男氏の「新しい」社会主義

第四回社会党大会（一九七七年九月）で社会党から脱落した田氏は、『ボイス』創刊号のインタビューでの「いまの時代というものを田さんはどういうふうに認識しているのでしょうか」との間に次のように答えている。

「田 人類の歴史というスケールで考えて、いま非常に重要な転換期にきているといえると思います。たとえば、いまから百五十年ぐらい前に、マルクスがああいう社会主義ということを言い出した当時は、資源あるいはエネルギーというものは無限のものだという原則に立っていたわけですね、その点についての危機感はなかった。そういう前提で資本主義批判をやったわけです。ところが今、社会主義の原点であるマルクス主義というものの自体が、その基礎にあった条件が崩れてきているわけですね（一五八頁）。

この「高名な」ジャーナリストは、「資源有限という現実、資本主義であれ、社会主義であれ、共通に困難な問題」だから、「現在ではもう資本主義か社会主義かという時代じゃなくなってきた」と、得意気におしゃべりしていらっしやる。

頭もツノもヤリも目玉もどこにあるのかさっぱりわからない田氏らしい発言だ。ところが読者諸氏は、「オヤッ、この考え方はどこかで聞いたことがあるゾ、一九八世紀後半から一九世紀の坊主マルサスの現代版じゃないか」と、言われるにちがいない。そして、「ああ、これで田氏の頭もツノもヤリも目玉もどこにあるかわかった」と。

田氏は、マルクス主義は古いといわれる。「新しい」時代に対応しなければならぬといわれる。ところが、田氏の依拠する思想はマルクスよりもっと古い。それは前資本主義の時代にまでさかのぼらなければならないのだから……。

周知のごとく、マルサスの考え方を要約すれば、次のようなものである。

「社会には貧乏、それに由来する貧困と悪徳が非常に多い。それについて、社会制度を改めさえすれば、それをとり除くことができるという説があるが、それはまちがいだ。なぜなら、社会制度を改めてみても、われわれ人間にはそうかんたんに変わらない性質があるからだ。それは、第一に、食物は人類の生存に必要であるということ、第二に、両性間の情欲は必要であって大抵いまのまま変りがあるまいということ。この二つの公準はわれわれの歴史の事実であり、その確定の法則である。いまこの法則と合して考えれば人口の増加力は人類の生活資料の増加力よりも大きいという結論がでる。すなわち、人口は幾何級数的に増加するの、生活資料は算術級数的にしか増加しない。そこでまた次の結論がでてくる。人間の社会にはこの不対等を対等にする力がいつもはたら

いて、それが社会を改善しようとする人間の理想を制限する。いいかえれば人間が完全性を増大するという予想はいつでもうちくだされる。」

マルクスは、古典派経済学者のなかで、だれよりもマルクスがきらいであった。マルサスの理論は、「人口が生活手段よりも急速に増大する」というように、自然法則として窮乏が表現されているからである。こうした理論は、資本家たちにおあつらえむきのものとなる。というのは、マルサスの理論は、貧乏・貧困・生活苦、つまり社会の諸矛盾を自然の結果にすることによって、資本家たちの良心をなくさめ、冷酷を彼らの道徳的義務たらしめるからである。

そればかりではない。マルサスの理論は、資本家に労働者階級が飢えて破滅するのを、他の自然的な出来事と同じように心を動かされずに平然と傍観する機会を与えるからであり、他方では労働者階級の貧困を彼ら自身の罪であるとみて、これを責める機会を与えるからである。

したがって、マルクス・エンゲルスは、マルサス理論を徹底的に論駁し、批判した。それは『資本論』第二三章資本主義的蓄積の一般法則に明らかである。

マルサスの人口論の特徴は、きまって資本主義の「危機」の時代にもちだされることである。昭和初年の恐慌期にどれほどはげしくマルサス理論が批判されていることだろうか。にもかかわらず、この「古い」理論が、「資源有限時代のキャンペーン」とともに、またぞろにぎにぎしく登場させられている。「新しい」社会主義の仮面をかぶって――。

田氏のいわれる「新しい」社会主義なるものを類推するとすれば、今日は資源有限時代だ、これは資本主義にも社会主義にも共通のことだからだ、だとすれば、資本主義にとって社会主義にとっても、乏しさを分かち合う。そうした体制こそが『新しい』社会主義のビジョンとでもいうことになるであろう。政府・自民党、日経連の主張とどこがちがうというのだろうか。しかも、田氏は「国有化万能の社会主義は排す」（これは今日、流行の「思想」でもある）とまでいわれるのであるから、資本家にとっておされることは何一つないことになる。こうした「社会主義」なら、資本家どもが両手をあげて歓迎するものあたりまえのことであろう。

なぜなら、社会による生産手段の没収、つまり、国有化とともに、商品生産は除去されたがって生産者にたいする生産物の支配も除外され、それとともに人間は自分自身の社会組織の主人となるからである。

■誌上学習会 マルクス・レーニン主義とは何か④■

マルクス主義はたたかいの中で発展

——レーニンと修正主義批判(一)——

『マルクス主義と改良主義』に次いで、今回からは『マルクス主義と修正主義』に入る。読者諸氏の感想、要望を寄せていただければ幸いです。

(編集部)

改良主義と修正主義の正しい定義

司会 今日とは二回目の研究会です。とり上げる論文は、レーニンの『マルクス主義と修正主義』(岩波文庫版『カール・マルクス』一六九〜一八一頁。以下の引用は特別の指示がないかぎり本書による・編集部)、報告は南さんをお願いします。

山田 その前に一言。レーニンはこの時期の一連の論文で「改良主義」、「修正主義」、「日和見主義」という言葉を頻繁に用いていますね。前にあつかった論文は『マルクス主義と改良主義』となっていました。基本的な問題で恐縮ですが、その科学的な定義をひとつ……。

南 私はこう思うんです。「修正主義」とは、マルクス主義をマルクス主義の名において「左」右にちよっぴりと、あるいは大きく「修正」する傾向であり潮流だし、「改良主義」はそうした潮流をふくむとともに、マルクス主義は「古い」と頭から否定する人々の潮流まで包含しているといっている。社会党から一九五九年に脱落した現在の民社党の人々、故江田氏、そして例の三人組などじつにいろんな「偏種」がある(笑)。

樹徳 日和見主義とは、したがって、マルクス主義から逸脱した傾向であり潮流だ。レーニンの労作『共産主義における「左翼」小児病』は、当時、ドイツ、イタリアなどの共産党内で支配的だった「左翼」日和見主義を批判したものでしょう。だから、日和見主義にもいろいろある(笑)。修正主義は、マルクス主義の内部にあってマルクス主義に敵対する傾向でしょう。結局、日和見主義であり、その「偏種」である。

鈴木 日本でいえば福本イズムがそうですね。わが国において「労農派」と「講座派」の二つのマルクス主義の潮流ができたのも、そこに背景がある。

司会 南さん、報告の方、お願いします。

マルクス主義はたたかいとられてきた

南 『マルクス主義と修正主義』は一九〇八年三〜四月頃に書かれています。樹徳氏の報告にもありましたが、ロシアの極反動期です。

前回の『マルクス主義と改良主義』もそうですが、レーニンがこの論文で何度もくり返し強調していることは、マルクス主義はたたかいとられたもので、たたかなくなるとその生涯の一步といえども踏みだすことはできなかったということですから。これが全篇を流れる精神です。それをもっともよく示すのが冒頭の一節です。

「幾何学の公理が人々の利害に抵触するとしたら、人々はきっとそれを反駁するだろう、という有名な格言がある。神学の古い偏見に抵触した博物学上の理論はまったく間違いじみた闘争をよびおこしたし、今日もなおよびおこしている。現代社会の先進的な階級の啓蒙と組織とに直接役立ち、この階級の任務を示し、現代の制度が——経済的發展の結果として——不可避免的に新しい制度と交替することを証明しているマルクスの学説、この学説がその生涯の歩みの一步を闘いとしてこなければならなかったことには、なんの不思議もない」（一六九頁）。

マルクス主義はたたかひのなかで鍛えられ強くなった

次に述べられていることは、そのたたかひの歩みについてです。一九世紀後半には、マルクス主義は、労働運動のなかで地歩をかためました。それは、『共産党宣言』一八九〇年ドイツ語版へのエンゲルスの序文にも明らかです。それにはこう述べられています。

「『万国のプロレタリア団結せよ！』いまでは四二年前になるが、プロレタリア階級が自己の要求をかかげてあらわれた最初のパリ革命の前夜に、われわれがこの言葉を世界へ向って叫んだときに、これに答える声はほんのわずかしかなかった。だが一八六四年九月二八日には、西ヨーロッパのたいがいの国のプロレタリアは団結して、思い出にかがやく国際労働者協会を組織した。このインタナショナル自身はたしかに九年しか生きなかった。だが、これによって創始された万国のプロレタリアの永遠の盟約は、いまも生きており、まえよりもっと力強く生きている。このことに対しては、まさに今日と今日以上によい証人はない。というのは、私がこの文を書いている今日、ヨーロッパとアメリカのプロレタリア階級は、一つの軍隊として、一つの旗のもとに、一つの当面の目標、すなわちすでに一八六六年のインタナショナル・ジュネーブ大会によって、さらにふたたび一八八九年のパリ労働者大会で宣言された八時間標準労働日の法的確立という目標のために、そのはじめて動員された戦力の閲兵をおこなうのである。そして今日の光景を見て、あらゆる国の資本家や地主どもは万国のプロレタリアが今日実際に団結していることについて、眼をひらくであろう。／ああ、マルクスが私と並んで立つことができ、これを自分の眼で見ることができたら！」（岩波文庫版『共産党宣言』、一九〇二頁）。

レーニンは、マルクス主義の歩みを二つの段階に分けて考えています。一つは、「マルクス主義（が）すでに労働運動のなかの他のすべてのイデオロギーに対して決定的に勝利

をおさめつつあった……前世紀の九〇年代」(一七〇頁)であり、他の一つは、ベルンシュタインに代表される「マルクス主義の内部でマルクス主義に敵対する潮流」との「闘争」(一七一頁)です。しかし、いずれの場合もはげしいたたかいぬきには、マルクス主義の発展と成長はありませんでした。

「有産階級の青年を愚鈍にし、内部および外部の敵と闘えるように『仕込む』ために、官学の教授たちがお役所風に教えるブルジョア的な科学や哲学については、言うまでもない。この科学はマルクス主義に耳をかそうとすらせず、それはすでに反駁され、絶滅されてしまったと公言している。社会主義に対する反駁で出世しつつある若い学者たちも、ありとあらゆるぼろぼろの『体系』の遺訓を後生大事にしている老いぼれたちも、一様の熱心さでマルクス主義を攻撃している。マルクス主義が成長して、その思想が労働者階級のうちに広がり、地歩を固めてゆくにつれて、否応なしに、こうしたマルクス主義に対するブルジョアの突撃がますます頻繁にまた激烈になってゆく。しかし、マルクス主義は、官許の科学によって『絶滅』されるたびごとに、ますますもつと強固な、もつときたえられた、もつと生き生きしたものになってゆくのである」(一七〇頁)。

このことは今日でもそのままではまります。ところが、マルクス主義の発展と成長は、マルクス主義の内部から新しい日和見主義、修正主義を生み出しました。エンゲルス亡きあとのベルンシュタインに示される潮流がそれです。

「前世紀の九〇年代にこの勝利は基本的な点で完結していた。ブルードン主義の伝統がどこよりも長く維持されていたラテン語系の諸国でさえ、労働者党は事実上それぞれ綱領と戦術をマルクス主義の基礎の上につくりあげていた。復活した労働運動の国際組織——定期的な国際大会という形での——は、最初からほとんど闘争なしに、あらゆる本質的な点で、マルクス主義の地盤に立っていた。しかし、マルクス主義がそれに敵対的な多少ともまとまった学説を追いだしてしまっただけからは、これらの学説に表現されていた諸傾向は別の道を探しはじめた。闘争の形態と機会とは変わったが、闘争はつづいていた。そして、マルクス主義成立以来の第二の半世紀は、マルクス主義の内部でマルクス主義に敵対する潮流の闘争から(前世紀の九〇年代)はじまった」(一七〇頁、一七一頁)。

こうも述べています。

「前マルクス主義的社会主義は紛砕されてしまった。それはもはや自身の独立した地盤のうえではなく、マルクス主義という共通の地盤のうえで、修正主義として闘争を継続している」(一七二頁)。

「マルクス主義内部でマルクス主義に敵対する潮流」、つまり「修正主義」をもつとも首尾一貫したかたちで表現したのがベルンシュタインです。その思想は「運動がすべてであり、究極目的は無である」という言葉に典型的に示されているところです。つまり、改

良のたたかいを積み重ねてゆきさえすれば、柿の実が熟して落ちるがごとく社会主義になるという思想がこれです。六〇年代はじめに構造改革論を唱え、第四〇回社会党大会後、「社会党に絶望した」として、社会党から脱落した故江田氏の立場は、ベルンシュタインの考え方をたいへん粗野な方法で体現したものです。

修正主義の思想的內容とその本質

こうして、レーニンが「修正主義の思想的內容」へと筆を進めます。第一に哲学、第二に経済学、第三に政治の分野についてそれぞれ言及し、修正主義の本質を明らかにするという手法がとられています。レーニンの言葉を借りながら基本的な点についてのみ、指摘しておきたいと思います。

第一に哲学について——この分野での「修正」は、弁証法的唯物論を「単純な」(「そして平穩な」)『進化』でおきかえたこと(一七二頁)です。このことの階級的意義はあまりにも明白です。したがって、レーニンも「それは自明なことである」(一七二頁)と指摘するにとどめています。

しかし、ここでたいへん興味深いことは、「ただここで注意しておくが、修正主義者たちがこの点で信じがたいほど月並なことをしゃべりまくったときに、国際的な社会主義者(マルクス・レーニン主義者と読め、編集部)のなかで、それに対して首尾一貫した弁証法的唯物論の見地から批判を加えた唯一のマルクス主義者はブレハーフであった」(一七二―三頁)と、ブレハーフの哲学的業績をたいへん評価していることです。レーニンは一九〇五年の第一次ロシア革命以来、ブレハーフと激しい路線論争をおこなったことは周知の事実です。こうした点にも論争はどうおこなわなければならないかが、示されているように思います。

第二に経済学について——今日の不況(恐慌)を考える場合、ここでのレーニンの指摘はとくに教訓に富んでいるように思います。経済はあらゆる生活の基盤をなす。それゆえに、マルクス主義の「修正」、「訂正」はこの分野でもっとも露骨に、かつ「詳細」におこなわれたとレーニンは言っています。

「まず第一に、この分野では修正主義者たちの『訂正』ははるかに多面的で詳細なものであったことを、言っておかなければならない。彼らは『経済発展の新しい資料によって』公衆に影響をおよぼすことに努めたのである」(一七三頁)。

ではどのようにマルクス主義が「訂正」されたのでしょうか。へたな解説よりも、レーニンの叙述をそのまま報告しますと——

「集積や大規模生産による小規模生産の駆逐は農業経済の分野ではまったく起こっていないし、商業や工業の分野でもごくゆるやかに進行している、と言われた。今日では恐慌はより稀に、より微弱なものになっており、カルテルやトラストは、おそらく、恐

慌をまったく排除してしまう可能性を資本に与えるであろう、と言われた。資本主義がそこに向かつて進んでいるという『崩壊の理論』は、階級矛盾がにぶくなり、緩和してゆく傾向から見て、成り立たない、と言われた。最後に、マルクスの価値論はベーム・パーヴェルクに従って訂正してさしつかえない、と言われた」（一七三頁）。

つまり、階級分化の問題、生産の無政府性と経済恐慌の問題、社会主義の必然性についての問題、そして価値論が、「訂正」の大きな課題となったというわけです。これらの問題が改良主義者・修正主義者によって主要な攻撃対象となっていることは、今日でも変わりません。

時間にかぎりがありますから、ここでは、恐慌理論や崩壊理論についてのみ、レーニンが修正主義者たちをどのように批判しているかを示しておきたいと思います。

「恐慌理論や崩壊理論については、修正主義の立場はもっとぐあいの悪いものであった。ごく短い時間にかぎって、しかも見通しのきかない連中だけが、数年間の産業の高揚と繁栄に影響されて、マルクス学説の基礎の改造などということを考えることができたのである。恐慌が過去のものになってしまったのではないことを、現実はずぐさま修正主義者に示した。繁栄のあとに恐慌がやってきたのである。個々の恐慌の形態、経過の様相は変わったが、恐慌はあくまでも資本主義体制の不可避的な構成部分であった。カルテルやトラストは、生産を統合したが、それと同時に、万人の眼前で、生産の無政府性や、プロレタリアートの生活不安や、資本の圧制を強めてゆき、このようにして階級的矛盾をかつて見ないほどに激化させた。資本主義が崩壊に向かっていっている——個々の政治的危機、経済恐慌という意味でも、全資本主義体制の完全な破滅という意味でも——こと、このことをほかでもなく最近の巨大トラストがとくに鮮明に、またとくに大規模なかたちで示した。最近のアメリカの金融恐慌、全ヨーロッパにおける失業の恐るべき増大——多くの徴候が指し示している産業恐慌の切迫は別としても——、すべてこうしたことの結果、修正主義者たちの最近の理論はすべての人から、そしておそらく、修正主義者たち自身のなかの多くの連中からも忘れられてしまった。しかし、このインテリゲンチヤの動揺が労働者階級に与えてくれた教訓は、忘れてはならないのである」（一七五―六頁）。

以上が、経済学の分野での指摘です。

（つづく）

◇ 投稿のおねがい ◇

▽今日ほど交流の必要なきはありません。読者のみなさんの職場・地域でのたたかいは、全国の働らく仲間には大きな激励と勇気を与えずにはおかないでしょう。ぜひ投稿をおねがいします。

▽テーマは自由です。二〇〇字詰一〇枚前後。あるいはメモでもかまいません。読者の皆さんのご健闘を祈ります。

精神面で「国民総合」をめざす

社説にみる独占資本の意図

マスコミ資本、したがって日本独占資本の意識状況は、ある程度マスコミ各紙誌の社説または巻頭言を通して推察することができる。

ここに五つの新聞社の元日付けの社説の切抜がある。

ふつう、社説は論説主幹とか主筆とかいった人々が書くが概して無署名が多い。元旦各紙の社説も大部分無署名だったが、一紙だけ——サンケイ新聞が「年頭の主張」欄に社長・鹿内信隆の署名入り記事を掲載している。

自民党の広報紙か——との悪評高い反動的紙面の多いサンケイが居直ったような形で社長署名の社説をのせているのが他紙にない姿である。ふだんのサンケイはしかし、他紙と同様、無署名の社説の形態をとっている。

元旦というので社長直々の社説の体裁としたのかも知れない。
社説の形態はその程度として内容に入ろう。

元旦の各社説はほとんど全紙がいいあわせたように一九七八年という年の厳しい経済・社会の見透しをのべている。内憂・外患、つまり内にインフレ、不況、倒産、失業、窮乏化を抱え、外からは黒字貿易にたいする「集中豪雨」的難難が浴びせられ、円高現象が行手に暗雲の存在を告げる。

経済紙の日経は「目先の透明感の著しく乏しい年明けである」とボヤキ、サンケイの鹿内社説も「昭和初年の大恐慌を想起して身の毛もよだつ思いをしている人も少なくないことと思う」と書き、毎日も「噴出した不安要因に、未来への視界は妨げられている」。朝日は「現代は手詰りの時代であることを認めないわけにはいかない」と手をあげた形だし、読売は少しかわって、この事態の反映として「日本国民の精神的な混乱はその極に達しているという反省がある」と日本人の精神構造にたち入っているが、いずれにしても、この「手づまり状態」を確認した上で、その克服への方途を探ろうとしている。

無理もない。生産第一主義でガムシャラに突っ走ったあげくの過剰生産不況を、人べらし合理化や中小零細企業の整理、農業の犠牲にシワよせする一方、活路を海外に求めて独占利潤の確保をはかる目録見が外れようとしていることに資本が危機感を抱くのはけだし当然だからである。

しかも「手づまり」を打開する有力な手段にこと欠く状況（朝日）」であり「アメリカという名のサンクラスに甘やかされてきた日本人がとつぜん眼鏡を外されたため、強い太陽光線のような国際情勢を直視して目がくらんでいるという風刺が卓抜（読売）」とされ、「戦争よりもっと厄介な経済的利害の調整のための知恵の闘いに追い込まれている（日経）」

のであり、「外庄利用型の政策転換の体質（朝日）」、「金ですます風潮（サンケイ）」、「ただのり（朝日）」からの脱却が求められているという。つまり「状況におしながされて混沌に至っている現状を、主体性をもって切りぬけねばならない。他人に左右されたり、他人をあてにしたりするようではこの危機は切りぬけられない」とする意識が濃厚である。いわゆる「甘えの構造」が破綻したとの認識にたっているのだ。

二

しかし——と社説は口をそろえて訴える。「この危機からの脱却のために、前後を忘れてはならない」と。毎日「この時代を乗り越えようとして急なあまり、不公平感を助長するような、弱い立場にある人々をおき去りにするような要素が頭をもたげてこないだろうか」と殊勝な危惧を表明し、読売は「やまとごころへの回帰」と国学のウンチクを傾け「弱者、貧者のため過度に傾斜した政治。それでいいではないか」とのたまひ、朝日は「長期的な利益」を基本的な視点とせよという。毎日の「その場しのぎに追われて先見性を失い産業主導型にのみ流れたとき、市民生活もやがておし流されてしまう。：ヒューマンな政治に、一歩近づける努力：」が「『和』を力として困難に立ち向かう、なによりの基盤づくり：」とする視点と相通するものがある。毎日の「混沌を乗り切る大きな支えに——暮らしを政治の中心に据え直せ」の主張は、その限りにおいて正しい「建前」の主張である。が、こうして各紙の社説を統合して見ると彼らは何よりも「事態の急激な変化」をおそれ、これを何とかして回避したいという「本音」がニジミ出てくるから妙である。

朝日の「各界・各層の既得権の修正」の主張、サンケイの「金ですむことなら……との悪しき風潮の断絶」の主張のなかには、きれいごとの表現のカケに、まさに「長期計画で各界・各層（独占資本を除く）の諸権利を抑え込む」意図が見えすいている。

物質的生活の向上を国民に保障できなくなった資本主義が、こんどは精神論で国民の統合を訴える傾向が強まることであろう。

日経は「：与野党も企業経営者も労組幹部も、需給ギャップの解消や雇用確保を政府に陳情する前に、みずから転換や改革、あるいは自己抑制をはかるために、なぜ知恵を発揮しないのか。国民一般もまた、みずからリスクを負担することなしには国が何事をもなし得ぬことを自覚すべきである」と前杖をついている。

だがサンケイのように「すべてを『金ですまそう』とし、金ではすまされない多くの貴重なものをないがしろにした……」としたり顔の指摘をする資格は実は彼らにはない。読売にいたっては武士道とのかかわりはないと断りつつ、本居宣長の歌などを引用して論をおこしているが、「ものあわれ」を解さぬのは、非人間である資本の特性である。

手づまりの日本資本主義の混沌脱却のために「いったい、自分たちが、そして国全体がどちらを向いて、どういうスケジュールで進むのか」明示せよ（日経）と為政者に求め、その場限りの対応「を叱っているが、夫子ら自身はすでにみたように、精神論にたてこもり途上国や弱者への同情論をイチジクの葉とした「やまとごころ」による「長期的視点の統合」を提起するにすぎない。

これこそ、社会主義以外に矛盾・手づまりを救えない事実の間接的な承認ではないのか。